

結婚の資格

藤原審爾



結婚の資格

藤原審爾



新日本出版社

藤原 審爾（ふじわら しんじ）

1921年東京生まれ、岡山県備前で育つ。

52年「罪な女」で第27回直木賞を受賞。

主な著書「落ちこぼれ家庭 上・下」「死に
たがる子」「天の花と実」「さきに愛あり
て」「結婚までを」「永夜」「秋津温泉」な
ど。

結婚の資格

1981年10月29日 初 版

定価980円

1982年4月15日 第3刷

著 者 藤 原 審 爾

発 行 者 松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3の11の8

発 行 所 株式会社 新日本出版社

電 話 東京 (478) 3311

振替番号 東京 3-13681

印刷 亨有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

結婚の資格

『女性のひろば』一九七九年八月号～一九八一年十月号に連載

薄い皮がそのたびはがれるように、これまでと違った快感がおそいかかってくる。快感が深くなる。全身がその新しい快感のために、はげしく白熱し液化して行くような心地がする。これまで感じたことのない新しい快感とよろこびが、雅美のすべてを熱くとろかして行く。心も魂も軀もすべてとろけるために集中し、そのことに熱中する。鈴木がそれをはげまし拍車をかけてくる。雅美はリズムカルに声をあげて白熱しとろけ夢うつつになる。繰返し洩れる声やがて絶え、あたりにおだやかな満ち足りたものがあたたかくたちこめてくる。白熱しとろけたものが、ゆっくり徐々にかたまりはじめ、やがて雅美になって行く。そのたびに鍊金されたように、より鈴木のための女になって行く。――その徐々に新たな自分になって行くしみじみとした満ち足りた時間が、雅美は好きである。よろこびの余韻の中にうっとり沈みながら、満ち足りた心地でぼんやりかたわらの鈴木を眺めているときが、最高の時間である。そつとうっとりした心地にひたりながら、じつと雅美はその余韻をたのしんでいる。そのうちそのなだらかな緑の斜面をすべりおりているような時間の中で、小人があらわれ、たのしげに踊りだすように、心がうごきはじめる。けだるくうっとりした雅美の中の心が、いまに自分は鈴木のために性の虜になったような女にされるのではないだろうかとおびえたり、こんなふうに自分を乱れさす鈴木がいとおしくなったり、にくらしくなったりする。こまかく幽かにきらめ

くように、小人はそんな踊りをいきいきと踊りはじめる。それがうっとりしびれている雅美の中に、倅せな心地をかきたてて行く。

その小人が、今日はいつまで経っても、雅美の中に姿をあらわさない。ベッドの中の裸の雅美は、気だるくしびれた軀の中から、よろこびが急ぎ足で去っているのを見送りながら、ぼっかり目をあけ、横の鈴木をぼんやり眺めていた。社では直接上司の営業部長だが、ここでは雅美の愛する男である。

小ぶとりの色白の鈴木は裸でうつ伏せになり、枕を胸の下に入れ、雅美のベッドからのりだすようにして煙草をすっている。白い煙草のけむりが、顔の前でひろがり流れて行く。汗ばんだ柔和な膚の横顔には、いかにも壮年の充実した男らしさがあり、いま一つの仕事をやり終えた満足と自信がうかんでいる。社での働きの鈴木とちがったもう一つの鈴木を、雄々しくみせている。その雄々しさは、青空に枝をひろげて聳える大きな樹のような、その木かげに入り、そこにもたれかかりたくなるようなものを持っている。そこにもたれかかっていれば、万事うまくいくような心地がし、より添って安らぎを保証してもらいたい気持ちをかきたててくる。びったしより添い、深くもたれかかって目を閉じ、細く息をしていくようになってくる。うたがいてもなくそこが、この世でたった一つきりの、自分だけの安らぎを与えてくれるところだというような気がしてくる。眺めていると次第にもっとびったりより添いたくなってくる。この安らぎと満ちたりた心を、自分とおなじように感じてもらいたくなる。

雅美は、そっと鈴木の手汗ばんだ二ノ腕に唇をおしつけ、もういちどそれをくりかえしながら、鈴木の手により添っていった。びったし一層ひとつになったような感触が、雅美の心をかろやかにして行く。今日は朝から鈴木に話しておかなければならないことがあって、それがきりだせなくて、雅美の

小人をうばっているのだった。瞬間、雅美はそこをのりこえた。雅美は顔を鈴木腕へおしつけて、目を閉じ、息をすいこんで細い声になった。

「あのね」

ほとんど同時に鈴木が、

「汗を流そう」

と煙草の火を消しはじめた。

「わたしね、明日、お見合いするのよ」

起きて湯に入りに行く気だった鈴木は、身をおこしたところで、えっという顔になり、動けなくなってしまった。ショックが鈴木を体をかたく凝縮させていつている。

「ほう」

鈴木はベッドの上でぎこちなくあぐらをかき、低いかすれ声をだした。しいんとなった。雅美はそんなふうには鈴木をおどろかさずつもりはなかった。いそいでその話のあとをつづけた。

「ことわりきれなかったの。すすめてくれる人が、来年父をやとってくれるスーパーマーケットの奥さんなの。父は来年定年で信用金庫をやめなければならぬの。ことわりきれなかったわ」

話しながら雅美は、自分の声があまえ声になって行くのがわかった。おどろいてこわい顔になっていた鈴木の気配が、はっきり変った。

「どこか、心の奥のほうで、つぶれたなァ」

いつもの調子をとりもどし、鈴木は優しい笑顔になって立ちあがった。ベッドを波打たせ、きしませて、ベッドから出た。もうそんなことを気にもとめてないように、入口のわきにある浴室のほうへ出かけていった。いつも彼は、終って帰る前に、ゆっくり湯に入るのである。

独りになった雅美は、鈴木のを抱えるようにして、そのうえに顔をのせ、ぼっかり目をあけていた。枕には鈴木のはの匂いがのこっており、それが幽かににおってくる。枕ばかりでなく、雅美の肌にも髪にも鈴木の移り香はのこっている。家に帰り、寢床に入って眠りかけたときなど、暗い闇の中でふと移り香が匂ってくることもある。するとそこにまだ鈴木がいるような気がありありとしてきて、よろこびが胸に満ちてくる。まるで隣に鈴木が寝ているように雅美は、おやすみなさいを言い、安らかな眠りにおちて行く。もとよりいつも湯に入ってから帰って行くのだが、移り香をずっとそのまま残していたい。鈴木のようにさっさと湯に入り、移り香をおとす気になれないし、さっさと湯に入る鈴木になんとか抵抗を感じる。

多分、と雅美は思う、女と違って男はそういうふうにはならないのだろう、一つ仕事を終えるときちつと区切りをつけ、次の仕事に備えるものなのだろう。そう思うようにつとめ、その答だけで満足し、思いがそれ以上にひろがらないようにする。もしもそれ以上の思いがわき立ってくると、雅美は自分に、きっぱり言って聞かせる。あなたは彼の家族のことを考えたりする必要はないのよ、それはあなたには関係のないことなのよ、あなたは妻子のある男に恋したわけではないわ、恋した相手に偶々妻子があっただけなのよ。

部屋は六畳で、ベッドに沿って中窓があり、足許のほうに冷房器がおかれている。枕許のほうは壁で、隣の八畳の部屋との境には襖がはいっている。布張りの天井から吊された灯も襖も中窓のカーテンも、特価品のような安っぽい感じのもので、そのほかにはなんの調度品もない。絵ひとつかかっていなくて、ひどく殺風景な部屋である。少しでも客の気持ちなぐさめようというような、人間らしい配慮がかけらほどもない。実際独りになり、そんな部屋とむき合っていると、いかにも居心地がわるくなる。壁や襖のところどころに、ほかの二人の客がつけた傷や破れがあり、それがいやな感じで迫って

くる。なんどもやってきて見馴れた部屋なのだが、独りでぼんやり眺めていると、だんだんみじめな気持ちになってくる。

もう築後六七年もたった建物なのだが、まるで人との交流がない、冷い表情の部屋なのである。どんな家だろうと、家というものには住んでいる人の気配が、しみこんでいる。家の中の様子をみれば、なんとなく住んでいる人のこころを感じさせられるものだが、この部屋にはそういう人のこころを感じさせるものがない。いつもこの部屋を掃除する人もいるし、経営者もいれば、このベッドをつかう者もいるのに、そういう人たちの愛が少しもうつっていないのである。ここは人々に愛されないで、むしろとうんじられるところなのであり、そのことが露骨に示されていて、こころをきずつけられる。どうかしたはずみにみじめな気持ちにさせられるところなのだが、そんなことは覚悟の上でやってきているのである。つらい思いをするのがいやなら、こんなところへ来なければよい。ここへくるのは、それ以上のよるこびがあるからだし、なにもあれこれ悩んだりすることはない。みじめな気持ちに幽かにうごめきだすと、雅美はすっとベッドから起きだした。いくら小麦色の雅美の軀は足が長く均整のとれた美しい線でつまれている。若々しい裸の雅美はいきいきと鈴木のとを追って浴室へ出かけて行きはじめた、きつと口を結んだ少し疲れた顔で。

かさつかさつと枯木の先で木箱をひっかくような足音が、朝のこころもちしめっぽく涼しい気配の中を、幽かに聞えてくる。雀の足音なのである。雅美は六畳の部屋の寢床の中で寝返りをうち、雨戸の閉めてある中窓のほうへ背をむけた。しばらく前から中窓の外の出窓の霧除けと庇の間に、雀が巣をつくっている。せまい三角のところに雀は枯木や藁や青草などを運んできている。出窓の霧除けは

板一枚のもので、雀の爪のある足音がよく聞えるのである。

小さい雀の足音なのだから、べつにやかましいというほどのものではないが、ときどき雅美は朝早く目を覚ませられる。たいていすぐまた眠ってしまうのだが、今朝は寝返りをうってから次第に眠りの中から抜けだした。今日の見合いのことが気にかかっているのである。そんな自分に気がつき、自分がかうとましくなり、雅美はきのうの鈴木のことを、なんとなくぼんやりと偲びだした。鈴木は見合いをすることを怒ってはいなかった。なにかもの足りない氣にしていなかった。黒いタイルばかりの浴室の白い浴槽の中に身を沈め、雑談でもするような調子で、

「どんな男だ」

ときいた。小さい椅子の上で、タオルを膝にのせ、石鹸をぬりつけながら雅美はちよっぴり不満だった。見合いだなんて、そんなつまらぬ真似をするな、とでもいうようなことを言ってもらいたかった。もとよりそんな言葉を言ってくれたとしても、なんの意味もないことなのだが、それでもそんなふうに言っただけだった。そういうことが、足手纏いにならぬように生きて愛しつづけようという心に、どれほど勇氣を与えてくれるかということ、彼は氣づこうとしない。雅美はそれで少し意地悪くなってしまった。奥歯にもののはさまっているような言いかたをしたものだった。

「子供の時、うちの裏にいた人。中学の先生よ」

「知っているのなら見合いをすることはないだろう」

へんな話だなと急にうたがいぶかく声が濁ってきたかと思うと、鈴木は湯から出てきて、雅美のうしろにまわり、雅美の軀に湯をかけてくれた。鈴木はホテルのタオルはどんな人間がつかったかもしれないから氣味が悪いと言って、掌で雅美を洗ってくれる。雅美の膝から石鹸をとり、大きな掌に塗りつけ、その掌で雅美の軀をいくしむように洗いはじめた。またこころよい刺戟が全身にひろ

がってくる。

「子供の時、お父さんが転動になって、ひっこしていったから、全然、わたし、覚えてないわ」

「いい人だったら結婚するか」

「そうしてほしい？」

「――」

「そうしてほしいのなら、そうしてもいいわよ」

「そんな気で結婚されては相手が迷惑だ。そんないいかげんの気持ちで結婚はしないことだ。心のよい男で、尊敬出来るものをもった人物をさがすんだ」

「そんなぜいたくなことは思えないわ。こんなわたしを貰ってくれる人なら、誰だっていいわ」

「そんなに自分を卑下することはない。君は素敵な人なんだ。もっと自分に自信をもたないと駄目だな。自分を大事にしなきゃあいけない」

その言葉と掌は反対のことをする。掌が縦横に雅美の軀のうえを撫でまわり、そのうち雅美はのっけぞり、彼の胸の中へたおれこんでしまった。

鈴木はこれまでになく熱烈でその愛撫は激しく執拗だった。黒い浴室からベッドまでつづき、雅美はたえだえの思いをさせられた。疲れてがくがくになった軀で、漸く家にもどり、寢床に入るとそれきり死んだように雅美は眠りに落ちたものだった。

ぐっすり眠った雅美の若い軀は、昨夜の疲れをもう拭いとして、いきいきとみずみずしくなっている。暗い朝の寢床の中で、雅美は昨夜のことを偲ぶうちに、その嵐のような愛撫の名残りがよみがえり、汗ばんだ肢をすっかりちぢめ、背を丸め、顔を蒲団に埋めた。火照りがどんだん軀の中に拡がって行く。身もだえして声を思いつきりあげたいような衝動が、うねりながらこみあげてくる。そんな

自分がおそろしい。すっかり閉じた瞼がこまかくふるえだし、高まりがおとずれてくる。雅美は喘ぐように顔をそらせ、胸をふるわせながら息をすいこんだ。いやだいやだというように顔をふって、すがりつくように声をあげた。

「お母さん」

高山信夫のことを、雅美はほとんど覚えていなかった。

雅美が小学校へ通いだした頃まで、信夫たちの一家は雅美の家の裏の借家に住んでいた。父親も母親も学校の先生で、どこかの学校へ転任になり引越していった。そのあと二三年してその借家がなくなり、市の研修所が建った。それで、よけい早く信夫たちのことを忘れたのだろう。母の安子に、ほらむかし裏に二階のある家があったと言われても、その家の様子がうかんで来なかった。それに安子の言いかたもよくなかった。むやみに信夫たち一家のことをほめて、雅美に好印象をもたせようとする。どんなによく出来た先生たちだったとか、信夫がとてもいい子で、いつもおまえを遊んでくれたとか、

「お兄ちゃんお兄ちゃんと言ってね、つきまどつてたもんだよ。もうお兄ちゃんが学校からもどつてくると言つて、坂の下まで迎えに行つてたんだよ、覚えてないのかい」

などと思議がられても、実際雅美は信夫のことをはっきり思いだせなかった。思いだそうという気にもならなかった。父の小学校の頃の友達で、スーパーマーケットをやっている小川の娘を、信夫は教えており、偶々家庭訪問のとき、雅美の話が出て、見合いしなさいよということになったそうなのだが、なんだかすつきりしていない。もしもほんとうにずっと自分に関心をもっていたのなら、同

じ市に赴任してきたときに、すぐやってくるはずである。そういうこともせず、小川の家で雅美の話が出て、見合いをけしかけられると、簡単にその気になったようなのである。自分の考えがない、なんだか頼りない男で、結婚ということにも深い考えはなさそうである。そんな相手なら、いつわりの見合いをしても、あまり気にすることもないだろう。その程度のいいかげんな気持ちで、見合いをすることを承知したのだが、いざ見合いという日になると、そう簡単な気持ちで居られなくなってきた。父や母たちばかりか妹の和子までが、朝はやくから昂奮したいへんなはりきりようである。親子四人の女の多い家庭なので、つましい暮らしを守ってきており、こんな大きな出来事などほとんどないものだから、家中がむきになり、うわずるのだろう。それも雅美の倅せをねがう気持ちからの騒ぎなのだから、独り知らんぷりをしているわけにはいかない。なんとなくいつまでも寝ていられなくなり、あわただしい気分になってくる。それがなんともうっとうしいのである。

見合いは市はずれにある池畔亭という古い料亭で、四時からおこなわれることになっている。四時にそこへ出かけて行き、その庭の中の池のほとりにある小亭で、信夫と一緒に御飯をたべるのである。見合いの話があったとき、雅美は、いたしかたなく父のために承知したのだが、

「会ってみて結婚する気になれなかったら、ことわってよ。そのときぐずぐずいわないでよ」

と言っている。鈴木のことがあるのだし、結婚などかけらも考えていないのだから、なにも自分までが落着けなくなったりすることはない。三時間ほどの間、退屈な連中と辛抱して会っていればよいのであって、なにも考える必要はない。ゆっくり寝ていればよいのだが、だんだん雅美は落着けなくなり、とうとう起きだしてしまった。

雅美の古ぼけた家は、平屋で田の字の造りである。北の隅の雅美の部屋から台所へ廊下がついており、左に三畳の和子の部屋があり、右のほうは一家団欒の居間で、算笥やテレビがおかれている。寝

具をしまい、普段着に着替えて雅美はその居間のほうに出ていった。初夏の陽が眩しいほど小さい庭と縁側にあたっており、樟脳の匂いをそよ風が運んできている。縁の庇のところに、父の達雄の紋つきの着物が吊してあり、風に裾のほうが揺れている。いつもつけっぱなしのテレビがついていないせいもあって、居間の様子がいつもと違っており、気軽く坐る場所がないような感じだった。とたんに裏のほうから、けたたましく安子ののぼせた声が聞えてきた。

「和子と子、お父さんは散髪しに行ったかい？ 見てきておくれ」

「なんどおなじことをきくのよ、さっき出かけていったわよ」

台所のたたきのほうから、和子がうるさそうに答えている。

「そうだったね、それじゃお姉ちゃんをそろそろ起しておくれ」

「まだ十時すぎよ、折角の日曜なんだからさ、もっと寝かせておけばいいじゃない」

「のんきなこと言ってる場合じゃないよ、お姉ちゃんは美容院へ行かなきゃならないんだよ」

「そうか、わかったわよ」

「わかったわじゃないよ、すぐ起しておくれ。お風呂にも入らなきゃならないんだからさ」

せまい家のことなので、安子の声はよく透る。一生懸命になっている安子の気持ちだが、その声と一緒にびんびんひびいてくる。なんの成果もあげられないことを、娘可愛さから夢中になってやっている安子は、馬鹿みたいなのだが、雅美にはどうすることも出来ない。自分がその仲間入りをするよりほかに、これという手がないのである。

「母さん、起きたわよ」

と雅美は馬鹿みたいに大きな声で返事をして、台所のむこうの風呂場のほうへ出かけていった。朝起きてすぐ風呂に入ったりするのは、お正月くらいのものである。なんだか贅沢すぎるような気がす

るし、落着いた入浴気分にもなれない。

「もう時間がないんだよ、さっさと入るんだよ」

すぐまた安子のけたたましい声が飛んでくる。

「わかってるわよっ」

ホテルのような黒いタイル張りの浴室とちがい、雅美のところは古い簀ノ子の敷いてある風呂桶がある。たった一つの高い窓があいており、そこからみずみずしい光が斜めに流れこんでいる。風呂桶も古びた腰板もよごれて薄汚ないが、しかし安らぎを与えてくれる。湯の中に身を沈め、雅美はちょっと鈴木のことを偲びかけたが、そんなゆとりはないのである。和子がいきなり、

「頭、洗ってあげる」

と風呂場へ入ってきた。中学生の和子は、男の子のような白い半袖のシャツに海のような色のようなショートパンツ姿で、はりきっており、目をきらきら輝かせている。

和子に髪を洗ってもらい、湯からあがると、はやく御飯をおあがり、もう十二時だよと安子がせかす。言われる通りに、急いで御飯をたべていると、和子が、

「お姉ちゃん、どの靴にする、磨いてあげる」

と言ってくる。まったく見合い以外のことを考えたりするゆとりがなくなり、そのうちそういう雰囲気の中に雅美はまきこまれてしまった。それなりにちゃんと見合いをしようというふうな気持ちになつていった。

池畔亭は、古びた武家屋敷のような大きな門を入ったところが、玉砂利を敷いた駐車場になつてい

る。

四時少し前、いくらか樟脳くさい紋付袴姿の父たちと雅美は、その駐車場でタクシーからおりた。

「雅美、もつとしゃんとおし」

「お父さん、ハンカチ持ったわね」

着物姿でめずらしく化粧した安子に、なんだかんだと言われながら、正面の大きな式台のある玄関へ近づいて行くと、式台のむこうの衝立の前へいそ太った小川のおばさんが、

「いらっしゃあい」

と出てきた。淡い青磁色の清楚な服をきて、白いハンドバックを持ち、白い靴をはいた雅美を、素早く見調べながら式台へおりてきた。

「とても綺麗よ。信夫さん、びっくりするわよ。庭の池のこの亭で待ってるわ。もう子供じゃないんだし、独りで会っておいで。わたしたちはこっちで、あとの相談をしてるからね」

「どうぞこちらへ」

と年配の小柄な仲居さんがすぐ雅美の案内をして庭のほうへ歩きだした。いきなり二人で会うようなことになるとは思ってもいなかったの、雅美はちよつとうろたえた。しかしここまできて、そんな面倒なことはいやだとは言えない。しかたなく仲居さんのあとから、母屋のむこう側の庭のほうへ出かけはじめた。

母屋をまわったところで、仲居さんは立ちどまり、庭のほうを指さした。

「あそこでございます、あら、いらっしゃいませんわね、お庭見物されてるんでしょ、すぐ戻ってまいりますでしょう」

お湯や飲物はテーブルの下戸棚に入っていると教えられ、雅美はそこから一人で信夫に会いに行